

たる1623年に刊行された『戯曲全集』ファースト・フォリオ（第1・二つ折り本）に収録されることとなります。

■四つの「フォリオ」の展開

そのファースト・フォリオには彼の作品で『ペリクリーズ』を除く36篇が集められています。しかし、その後このフォリオには誤りがあるとして、以後3回にわたって改訂本が刊行されました。

1632年のセカンド・フォリオ（第2・二つ折り本）はファースト・フォリオを印刷用原本に使い、詳細部分を約1700箇所にわたって訂正を加えたもので、作品の組み替えは行われていません。

サード・フォリオ（第3・二つ折り本）は1663年と翌1664年の二度にわたって刊行され、1664年の版では7篇の戯曲が加えられました。しかし、その7篇の内、『ペリクリーズ』を除いては彼の作品ではなかったのです。

1685年に作られたフォース・フォリオ（第4・二つ折り本）は誤りのあったサード・フォリオを作品の組み替えを行わずに訂正したもので、その結果、四つのフォリオの中で最も粗悪なものとなります。

このフォリオの研究途上で、文学や書誌学の研究者は次第にファースト・フォリオの価値を認識しますが、上記の結果が明らかになる19世紀までには、まだ100年以上の歳月を要したのです。

■ベン・ジョンソンの賛辞と人々の混乱

話は1623年に戻ります。古典語の大家であるベン・ジョンソンがファースト・フォリオ巻頭の追悼詩でシェイクスピアの語学力を「僅かのラテン語と、更に僅かのギリシア語」⁽²⁾と評します。ジョンソンはシェイクスピアと同時代に詩人や劇作家として活動しており、彼のこの表現は自負心もあってか素直なものではなく、シェイクスピアの古典語に対する習熟度が実は高かったことを述べたものと考えられています。

しかし、彼の言葉を直接信じた人々が、ギリシアやローマ時代を舞台にした作品は、他の人物のものとする見解を示しました。また、そこから派生してシェイクスピアという人物自体が他の人物であるとする別人説や、複数の人物から成るグループと考える人々も現れます。

これは一知識人の見解を切掛けにした混乱ですが、知的所有権が明確であれば防げたものです。特にシェイクスピアの場合は、豊かな才能に作品の刊行という商業主義が絡んだことで、一層混乱を深めたのではないのでしょうか。以後、約400年にわたる研究者の努力で、彼に纏わる多くの事実が解明されてきました。それでも未だに「謎」とされる部分も残っているようです。

■その頃日本では、そして古典となった現在では

シェイクスピアの作家活動の充実期と見なされる西暦1603年には、「黄金時代」を打ち立てたエリザベスI世女王が亡くなります。

この年、日本では徳川幕府が開かれ、都では出雲の阿国が斬新な歌舞伎踊を演じました。1688年になると元禄時代を迎えます。そこでは新しい文化が花開き、竹本義太夫（1651-1714）や近松門左衛門（1653-1724）が人形浄瑠璃や歌舞伎の脚本を創って舞台芸術の価値を著しく高めました。

ちなみに、近年、戯曲や台本作家としての類似性からシェイクスピアと近松を比べる動きがあります。二人の出生年は前者が89年早く、創作活動の開始時期も凡そ90年の開きを確認できます。この年代の差異と日英両国の歴史や文化的相違を認識しながら両人の作品を対比し、登場人物を通して人間の本質や行動様式を探ろうとする研究です。

このように、誕生から450年を迎えるシェイクスピアが、文化や環境が大きく異なる他国の歴史的作家と比較されることは、長い間の批判に耐えて、今なお社会に通じる業績と高い知名度を維持している所以であり、彼こそ時や国境の概念を超越した不動の文豪なのではないでしょうか。

主な参考文献と脚注

- (1) 印刷過程で、全紙1枚を十文字に2回折り、表裏に計8頁分を刷ったものをクォート（四つ折り本）とよぶ。これに対し、フォリオ（二つ折り本）は全紙を中央で1回折り、表裏4頁分を印刷したものである。従って、判はフォリオの方が大きくなる。
 - (2) 小津次郎（責任編集）『シェイクスピア作品鑑賞事典』南雲堂 1997年 527頁。
- 『ウィリアム・シェイクスピア—作品と参考文献—』京都外国語大学付属図書館 1978年。

おく まさよし（司書・事務長）